

## 海外の話題

# グレートブリテンおよび北部アイルランド連合王国

農林中央金庫 ロンドン支店長 山宮 隆昭

9月18日に行われた国民投票において、スコットランドの独立は住民の賛成多数を得ることができなかった。スコットランドの人達の真意を推し量るとすれば、スコットランドに対する強い思いはあるものの、実際の投票に際しては日常生活を含めた経済的影響という要因が大きく作用したのではないだろうか。

307年前に連合王国の一部として組み込まれるまで、メル・ギブソン主演の映画「ブレイブ・ハート」で描かれているとおり、スコットランドは常に隣国のイングランドと争ってきた。国民投票が行われた2014年は、スコットランドがイングランドに対して歴史的な圧倒的勝利をおさめた「バノックバーンの戦い」からちょうど700年に当たる年である。

また日本ではあまり馴染みがないが、英連邦に加盟する国々にとっての一大イベント・コモンウェルス大会（Commonwealth Games）が、2014年は7月末から8月初めにかけて71の国と地域の参加によりスコットランドのグラスゴーで開催された。「スポーツを国威発揚の場に利用すべきではない」と言われるが、今回の大会がスコットランドの人々の独立心・自尊心をくすぐったのは事実だろう。特にメダル争いでイングランド・オーストラリアに次ぎ、カナダを上回って3位に位置していた前半は、テレビで現地の盛り上がりを見て、「ひょっとしたら、この勢いで独立も？」と感じた程だ。閉会式の翌々日に行われた第1回目のテレビ討論会で劣勢に終わって勢いを失ったかに見えた賛成派が、8月末に行われた2回目の討論会では盛り返し、直後の世論調査では反対派を猛追・一時は逆転した。

しかしながらご存知のとおり、最終的な住民投票の結果は独立反対である。反対派だけではなくイギリス政府も、「ポンドは使えない（使わせない）」とか、「独立による住民の家計への負担増加」といった身近なマイナス材料を示してきており、スコットランドの人々は大きな変化に対して不安を抱いていたということだろう。スコットランドに長く駐在していた取引先の方も、「スコットランドで働く職員には、そういった不安から現状維持を望んでいる者が多いと感じる。」とおっしゃっていた。独立賛成が多数となっていたら、この問題はイギリスにとどまらず、スペインをはじめとして同様の問題を抱えている各国へも波及したはずだ。

何はともあれ、スコットランドの住民は連合王国に留まることを選択し、当面はこれまでと同じ生活が続いていくことになる。またユニオン・ジャックの青い斜めクロスもそのままだ。昨年のウィンブルドンで70年ぶりにイギリス人として優勝したアンディー・マレーはスコットランドの出身で、トーナメントの初めは、青地に白い斜めクロスのスコットランド国旗が目立ったが、勝ち進むにつれてユニオン・ジャックを手にした応援が増えてきた。地元を大切にしている意識も大事だが、スコットランドの人達がユニオン・ジャックを持ってマレー選手を応援する時こそが、本当の連合王国と呼べる時なのかもしれない。